

「開眼（かいげん）」

眼が開くと書いて「開眼（かいがん）」という言葉があります。

例えば、国民栄誉賞受賞第一号となった当時のプロ野球の王貞治選手はジャイアンツに入団後、投手から打者に転向しますが、打撃不振に悩みます。そして荒川^{ひろし}博コーチと共に、打撃フォームの試行錯誤が続きます。その中で試した「一本足打法」により打撃に開眼（かいがん）し、以来、二度の三冠王、通算八六八号ホームランと、野球史に残る記録を打ち立てます。このように、物事の本質に目覚め、コツを掴むという意味に使われます。

他にも、ゴルフに開眼（かいがん）とか、中には、ラーメンのおいしさに開眼（かいがん）とか、気づく事全てに応用しているかのようです。

この開眼（かいがん）は、本来は開眼（かいげん）とも読み、仏教由来の言葉であることはあまり知られていません。仏教本来の意味は、智慧の眼を開くこととか、真理をさとることといったものです。

また、新たに造った、あるいは改修をされた仏像や仏画を本堂やお堂、お仏壇に安置する際は、仏さまの眼を開く意味での開眼（かいげん）法要を行います。仏さまの魂を入れる儀式でもあります。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

この法要儀式により、造られた仏像、仏画が、私たちが信仰し、手を合わせる尊い対象となるのです。ただ、開眼（かいげん）法要をすれば良いというものではありません。実際にその仏像、仏画が、またその置かれた場所が、それぞれの皆さまの心のより所となる事が大切なのです。インテリアとして仏像や仏画を安置する事もあるようですが、本来は開眼（かいげん）法要を行い信仰を深めることが大切です。

仏像、仏画はお釈迦さまをはじめとする仏さまで、信仰の対象です。テレビの紀行番組や、写真集、博物館などで見た仏像に心ひかれることもあるかと思いますが、それはその地域の方々や、その仏像、仏画を心のより所とされた人びとの信仰の深さを感じるからなのかもしれません。

どうか仏像、仏画との出会いを大切にしていきたいと思います。その出会いによってその奥に広がるお釈迦さま、多くの仏さまの教えに触れ、様々な縁によって生かされている自分に気づき、生き方を見直してゆく。

私たち自身の開眼（かいがん）に繋がるのかもしれません。

— 終 —